

「日中に懸ける」を超えて —東亜同文書院、愛大が輩出したグローバル人材に学ぶ—

愛知大学経済学部教授、愛知大学前学長 佐藤 元彦
(2016年8月27日 名古屋市博物館)

こんにちは。ご紹介に預かりました佐藤です。本日はこういうテーマで話をすることになったのですが、そもそもなぜ私が登壇をしなくてはいけないのかということ、資料を準備しながら色々と考えてみました。結局は、今年の11月まで学長をさせていただいておりましたが、学長職の期間、東亜同文書院大学記念センターをかなり激励してきたというふうに自負をしております、そのことを少し話せよということなのかなと感じて準備をしてまいりました。パワーポイントの準備ということも考えたのですが、私自身は実はあまりパワーポイントが好きではないのです。その理由を話すと、多分30分ぐらい話すことになるだろうと思いますので、話しませんが、一応レジュメを準備させていただいておりますので、そちらをご覧くださいながら話を聞いていただければ、と思います。藤田先生の話、その前のDVDで私の話す内容はほぼカバーされておりますので、学術的な意味合いも含めて何か新しいことを話すということでは決してありません。おそらくDVDなり、藤田先生のお話なりとは少し違う見方をするとどうなるのかなということ、この機会に少しお話をさせていただければと思います。それに先立って、今日カバーを外してきているのですが、藤田先生がかつて中日新聞の夕刊に連載をされて、それが一冊の本として刊行されたのがこれでありまして、『日中に懸ける』というタイトルがついております。ご存知でない方もいらっしゃるかもしれません。ちらほらとおられますね。中日新聞社から刊行されておりますので、ぜひこれをお買い求めいただけて一通りご覧いただければと思います。この『日中に懸ける』ということの意味合いを私なりに考えた場合に、



少し誤解を生じうるタイトルではないだろうかな、というふうにこの間感じてまいりました。それは何かというと、実はこの本の最後の部分というのは、コスモポリタンという中見出しがついているのです。ですから『日中に懸ける』ということは、これは前提としてはそうなるのかもしれませんが、結局は、先ほどの藤田先生の最後のところでご紹介がありましたけれども、東亜同文書院(大学)がコスモポリタンを養成してきたのであろうということをやはり抜きにしては東亜同文書院(大学)のことは語れないのだと。愛知大学は後継としてその精神を受け継いでいくわけでありましてけれども、コスモ

リタン養成ということはやはり重要なテーマ、ポイントなのかなということを感じております。そういうことを、今日は少し時間をいただいてお話させていただきたいと思います。

今申し上げましたことはレジユメの最初のところにも書かれておりますけれども、藤田先生の書では、今まで幻の名門校といわれてきた東亜同文書院（大学）につきまして、そこで学んでいた学生、あるいはそこで働いていた教職員の实像にせまる中で、かなりビビッドに浮き上がってきている側面があります。形式的には、例えば華日辞典、中日大辞典の編纂とか本間先生、東亜同文書院大学の最後の学長が愛知大学の事実上の創立者であったということとか、いくつか東亜同文書院（大学）から愛知大学へという流れを示すものがありますけれども、それだけではない部分、実際にどういう生き様を示されてきたのかということが非常に分かりやすく書かれています。しかしその一方で、東亜同文書院（大学）が中国、あるいは日中の提携ということだけを趣旨としていたのかということを含めて考えてみると、やはりそれだけではない、もっと広がりを持った存在であったというふうに考えざるをえないと思います。それは、東亜同文書院（大学）だけではなくて、先ほども出てきておりましたけれども東亜同文会が経営をしていた他の教育機関、研究機関を合わせて考えた場合に、もっと広がりを持った教育観、世界観に裏付けられた存在だったと考えるべきではないかということでもあります。先ほど、東亜同文書院に先だって設立された東京同文書院の話も出ました。また、同じ東京同文書院の敷地に、目白中学もあったわけですが、その目白中学は、ご案内の通り、その後、中央大学の附属杉並高等学校、現在の中央大学附属高校ですね、に連なっていくわけでもあります。それも、また当初の段階においては、東亜同文会の経営の考え方がそこに投影されるという、そういう存在だったわけでもあります。そういう意味では色んな所に学校を作られた東亜同文会の考え方、これをもう少し網羅的にかつ詳しく調査をしていくということがまだまだ必要なのかなというふうな感じがしております。レジユメにも書いてありますけれども、東亜同文書院（大学）は中国、日中関係が軸ではありましたが、しかしそれに留まらない世界観なり価値観を持った存在だという点はやはり外せない、というのが私の率直な印象であります。そのことは、愛知大学の設立趣意書に書かれている国際的教養と視野をもった人材の養成につながるのであります。なお、現在様々なかたちで展開されているグローバル人材論議ですが、本学のこうした伝統に照らして比較した場合に、いかがなものかなと感じる部分がありますが、それについては最後に少し触れさせていただきたいと思います。

さて、東亜同文書院（大学）でございますが、その興学要旨、また立教綱領を改めて読んでみますと、確かに中国、日中ということが前面に出てきます。なお、先ほども出ておりましたけれども、支那の保全という部分については、その後、保全するというのは相手を下に見る見方に連なるものがあるということで、これは 1909 年の東亜同文会の総会で削除すべきだという提案がなされて、それが承認されているわけでもあります。このことは、藤田先生の本にも出てきますし、そもそも東亜同文会の歴史の調査の中で先ほども名前が出てきておりましたけれども、小崎さんによって指摘をされたところであります。つまり、保全をするというよりはお互いに対等の立場で関係を結ぶと。その先には、欧米の列強と戦っていくと。そういう理念があったんだということは、まさに確認すべき前提になるのかな、という感じがしています。その一方で、中国語はもちろんですけれども英語、これも非常に重視されたというふうに認識しております。先ほどの藤田先生のお話では中国語が 12 コマ、英語は 6 コマということでありましたので、私のレジユメのこの点に関する

部分は訂正したいと思いますけれども、実はご案内の通り、選抜試験の中に英語がきちんと位置づけられていたということも含めて、私は書院生の英語力というのはもともとかなり高度なものであり、それをさらに書院時代の教育の中でレベルアップをしていったと、このように認識しているところでもあります。そうでなければ書院の卒業生の皆さんが中国を超えて世界的に活躍するというはかなり難しかっただろうというふうに思われますので、やはり英語力も含めて非常にレベルの高い外国語運用力を持っていた、あるいはそういう教育を受けたというふうに考えざるを得ないのではないか、ということでもあります。東亜同文書院（大学）の研究について私は素人ではありますが、研究対象として中国語教育というテーマはかなり出てくるんですけど、英語教育あるいは他の外国語教育という話はほとんど目にしたことがありません。しかし、科目表でも明らかな通り、英語もきちんと位置づけられております。レジユメにも少し書きましたし、これはまた藤田先生からの受けうりでもありますけれども、700 ぐらいにおよぶ調査旅行のルートの中でフランス領インドシナに及ぶケースもあったわけでありまして、先ほどインドネシアやミャンマーも出てきていたかと思えますけれども、フランス領インドシナも出てきていて、フランス語を習得してフランス人と対等にやり合う、そういう意味でのフランス語が必要だという、そういう声も書院生の中では上がっていたというふうに聞いております。そうなると中国語が中心ではありますけれども、中国語だけではないと。そういう話になっていくのではないかと思います。

愛知大学の設立趣意書については、先ほどもふれましたが、そこには中国、あるいは中国語についての言及は特にありません。この点は、東亜同文書院（大学）時代の教学、あるいは興学の理念というものの記載と少し違うところでもありますけれども。これは興亜ということが大きなテーマであったからであり、そうではなくて植民地化が終わり国家主権はいかなる大国でもどんな小国でも平等であるという時代を受けての記載の仕方は違ってくるという意味では、ある意味では当然の記載になってくるのかなというふうに思っています。先ほどから申し上げる通り、中国あるいは中国語というのは中心ではありますけれども、実はそれだけにとどまらないというところを見ておかなければ、東亜同文書院（大学）、あるいは東亜同文会の教育というのは分からないということでもあります。そのことをしっかりと愛知大学の設立趣意書は受け止めた上で多分このような記載になっているのかなというふうに思います。ちなみに、愛知大学の最初の研究機関は国際問題研究所という名前です。1948年のスタートでありますけれども、そこにも名称としては中国というのは入っておりません。中国が中心である、あるいは中国に特色を出してきたということは、これは皆さんもよくご存知の通りでありますけれども、実は中国と他を比較するとか、中国をもっとグローバルな、国際的な舞台の中に置いて研究、調査をするということも同時に進められてきたということを考えるならば、先ほどから申し上げているような視点、つまり中国、中国語が中心ではあるもののその基底にはそれを越えた国際的、あるいは今日多用されているグローバルな視点があったと考えざるを得ないと思います。ご案内の通り、愛知大学には国際系の学部として現代中国学部と国際コミュニケーション学部がありますけれども、これはある種、特色を出すという意味合いと理解できます。ただ、以前は、特にそういう名前がなくても実際問題として中国についての教育研究、さらには中国以外を含めた国際的な視野に立った教育研究というのがなされていたという観点からすると、少し立ち入った言い方になりますけれども、逆に現代中国学部、国際コミュニケーション

学部、あるいはそれらの上に設置された大学院の二つの研究科以外の部分の国際的な取り組みというのが少し弱くなってきているのかな、という印象を私自身は持っているところでもあります。ともあれ、今申し上げましたようなことを背景にして、今日いわれるところのグローバル人材を多数輩出してきたわけでありまして、具体的にどういう方がおられるのかにつきましては、藤田先生のお話しの最後のところで紹介されていた通りであります。

本日は、大学の同窓会の関係の方々もおられるようでありますけれども、もっとも卒業生でグローバルに活躍をしているという方々の名簿の掘り起こしをして、それを愛知大学の現在の教育研究に繋げていくということがやはり重要なんだろうな、そういうことに重点的に取り組んでいくことが必要ではないかな、ということを感じているところがあります。その意味で、これも皆さんがすでに名前を聞いたことがある方ばかりかも知れませんが、いくつかのケースを次にお話させていただきたいと思います。まずは、カンボジアに学校を建設する、カンボジアの貧しい子どもたちの教育をボランティア活動として行うということをこの間続けられてきた國近敏信さんという方のお話であります。レジュメには、下澤嶽さんから皆さんもよくご存知の山田耕平さんまで三人の名前が挙がっておりますけれど、その前に書院卒業の國近敏信さんという方も追加をさせていただきたいと思います。この方は、今申し上げましたように、カンボジアに学校を建てるということについて尽力をされてきた方でありまして、それをいわば第二の人生の中で行ってきた方なんです。先ほど藤田先生からご紹介があった方々については、現役時代にどういう仕事をされてきたのかということの紹介が大半であったと思いますけれども、國近さんについては、現役時代どうだったのかということについては十分な情報を持っていません。ともあれ、リタイアされた後にカンボジアとの市民交流を続けられてきたという、そういうケースであります。私も、実は広島には2回にわたってのべ6年ほど住んでいましたが、広島というと、この前のオバマ大統領の訪問でもそうでありますけれども被爆の体験をいかに世界に発信していくか、あるいは被爆の体験をベースにしていかに平和の活動を拡充していくのかということが中心になるのですけれども。その一方で、それにとどまらない形で、現代により即した形で、世界平和に貢献する活動というのは必ずしも活発ではありません。そういう中で、アジア競技大会が広島で開催されるという背景の中で、ただ単に被爆の体験を語り継ぐ、被爆の体験を世界に発信するというだけでなく、より具体的直接的に世界の平和に貢献をする、そういう取り組みが1990年代から強まっています。そのような状況下で、同じく戦争の被害にあって戦争が終わった後の社会再建をどうするのかということが非常に大きなテーマであったカンボジアに対して、広島が被爆直後の経験というものをベースにしてどう貢献していくのかということについて、これは県レベル、それから広島市レベルを含めてかなり計画的重層的に実施されてきた経緯があります。その際に、県なり市が直接行うということではなくてそれを担うための民間団体、あるいはNGO、ボランティア団体というものを立ち上げてそこが実施する形をとり、行政は側面的に援助をする、関わっていくということが、この間、90年代半ばからありますので20年続けてこられたということになるかと思いますが、そのカンボジアとの市民交流の中で「ひろしまハウス」というのをカンボジアに設立して、実はさっき名前を申し上げました國近さんという方が奥様と共にその館長を務められてきました。ちなみに、「ひろしまハウス」では、國近さんのお話では、小学生の教育であるとか図書館の開設であるとか、そういう事業が取り組まれているようでもありますけれども、國近さんと実際

に話をしている中でそこで語られる話の背景にあるのはやはり書院の精神ではないかと私自身は感じてまいりました。先ほども申し上げましたように、戦争が終結した後、戦争の被害からどうやって立ち直っていくのかという点で広島の実験が役に立つのではないだろうかということがあったわけではありますが、ただ提言、発言をするということではなくて実際に汗を流す、最近はなかなか行けなくなっているという話を聞きましたけれども、かなり頻繁にカンボジアに足を運んでその活動を担ってこられたということでもあります。おそらく第二の人生というところまで含めて書院生の足取りを辿っていくと、他にももつと色々なケースが出てくるのではないかと思います。ともあれ、國近さんのご経験は私にとっても非常に印象深いもので、現役の学生にも紹介していきたいと考えています。

次に、レジュメに記した三名の方々のことについて少しお話をしたいと思うのですが、すみませんが、話している中でもう一人思い出した方がおられます。先週の末、ちょうど一週間前でしょうか、一村一品運動などで名前が知られている平松さんという方、元大分県知事でありますけれども、が亡くなられました。一村一品運動は海外ではかなり盛んでありまして、そこに経済産業省も注目してバックアップしてきた経過があります。実はその平松先生が県知事を辞められてから自ら協会（大分一村一品国際交流協会）を立ち上げてその活動を続けてこられたわけでもありますけれども、その事務所で働いているスタッフの中にも愛大卒業生を偶然に見つけたんですね。法学部出身の方であります。元々大分のお生まれで愛知大学の法学部に入って卒業後にそこに勤務をされたという方で、女性でありますけれども、そういう方もおられます。そういうことも含めて書院のグローバルに活躍をするという、そういう人材養成の精神が愛知大学にも引き継がれて、結果的にそういった人材が出てきているというふうに理解をしているということを改めて申し上げたいと思います。

それでは、レジュメに具体的に名前を記載させていただいた方々の話をします。これは、ちょうど 1950 年代生まれ、60 年代生まれ、それから 70 年代生まれという形になっておりまして、まずは下澤さん。この方は、豊橋のご出身でありまして、当時の法経学部の経済学科のご卒業であります。この方は在学中当時の政治的活動に少し違和感を感じておられたそうでありまして、自分の活動する場をボランティア活動に求められたということで、実際に卒業後はイギリスのボランティア団体と接触され、その後の人生設計をする上で非常に重要な経験をされたというふうに聞いております。イギリスから帰られてから他の色々な地域での経験もされているわけでもありますけれども、特にバングラデシュで、シャプラニールという非常によく知られた NGO があるわけですが、そちらに入られて事務局長まで歴任をされた、そういう方です。シャプラニールというのは、その前の名前はヘルプ・バングラデシュ・コミッティー（HBC）という名称でありましたけれども、日本の中ではバングラデシュに関わるボランティア団体、NGO というのは当時はまだまだ少なかった中で地道に活動をされてきて、今申し上げましたように、事務局長まで歴任されました。さらには、JANIC という日本の国際協力 NGO を束ねるという位置づけがなされている組織の代表としても活躍をされたというご経験の方です。別の言い方をしますと、外務省と国際協力 NGO 側との協議の際には、下澤さんが NGO 側の代表として外務省との協議に臨む、そういう立場にあった方です。現在は静岡文化芸術大学の教授をされておりまして、国際文化学科長も務められておられます。下澤さんも、中国とか日中ということに限定されない非常にグローバルな感覚を持った方のお一人とし

てご紹介できるのではないかと思います。

二人目は石坂貴美さんであります。石坂さんについては「愛大通信」という大学の広報誌があるのですが、その200号に登場された方でもあります。そこにも書かれていますけれども、経済学部を卒業されて愛知大学の事務職員になられますけれども、そちらを辞められて、ちょっと後先が正確には覚えていないのですけれども、ウガンダ、彼女にとってウガンダというのは世界で最も貧しい国の一つだというふうに認識されていたようであります。ウガンダに飛び込んでそこで貧困問題の解決という、そういうミッションを自ら感じて取り組んでこられた方でもあります。その後、バングラデシュに青年海外協力隊員として染色の技術を伝授しに行かれたということが本格的な活動の最初になるかと思えますけれども。青年海外協力隊を辞めて戻ってこられてAHIという、現在は公財、公益財団法人でありますけれども、聞いたことがおありでしょうか。愛知大学の旧名古屋校舎があった黒笹駅から近いところにありますけれども、そちらで仕事をされつつ、その間に通信教育で修士の学位をとられ、その後さらに上を目指すということで東大の駒場のほうでありますけれども、大学院の博士課程に入られました（注：昨秋、博士号を取得）。この方もバングラデシュとの関わりが深く、ベンガル語は堪能です。

3人目の山田耕平さんは、おそらくここにおられる方はどなたもご存知ではないかと思いますが、現代中国学部を卒業されてその後他大学の大学院に進学をされ、そしてこの方も青年海外協力隊員としてアフリカのマラウィに赴任されました。反エイズの活動をされ、キャンペーンを展開するための歌を自ら作詞作曲されて、それがマラウィではヒットチャートのナンバーワンになったという、そういう経緯がございます。この方と何度か話をしたことがあるのですけれども、海外は現代中国学部の現地プログラムが最初であった、とのこと。もちろん中国との関係、中国との協力ということも考えたけれども自分は中国だけではなくもっと広い範囲で取り組みをしていきたいというふうに考えるようになって青年海外協力隊に応募され、さきほどもふれましたけれども、マラウィに赴任地が決まったということでもあります。その後ミャンマー在住などを経、現在はアフリカのルワンダに在住とのこと。余談ですが、ルワンダと聞いて最初に思い出したのは1990年代の民族間の対立によるジェノサイド、大虐殺があったということでもありますけれども、それから20年ほど経過して今は政治的にはかなり安定しているそうです。彼と話をしていると、中国との関係、あるいは中国での経験が大きなきっかけになって、しかし中国には限定されない働き方をしたい、グローバルな舞台で活躍をしたい、そういう意気込みをひしひしと感じます。

時間の関係もあり、ごく一部の方々しか紹介できませんでしたが、中国以外にも活躍している卒業生が少なからずいる、中国との関わりを契機に、しかし違う分野で、もっと広い舞台で活躍をするという、そういう人材も多数輩出してるんだという点に、これまで以上に目を向けていく必要があるのかなというふうに改めて考えております。同窓会の海外組織はまだまだこれからですので、ぜひ強化をお願いしたいと思います。つまり、今海外でどれだけの愛大生が活躍をしているのかということ把握し、そこからその経験を現在籍している学生に伝えていく、そういう取り組みが一層必要だと感じています。

最後に、昨今のグローバル人材に関する議論について少しコメントを述べさせていただきます。話を終えたいと思います。私は、今日本で交わされているグローバル人材論議は極めて日本的だなというふうに感じています。日本でこういう議論をしてみると私の知人の海外

の方に話をしますと、どうしてそんな議論をするのかというレスポンスがまず返ってきます。コミュニケーション能力、異文化理解力、日本発信力、それだけなのかという話です。それらを基底において支えるのはどういう資質、価値観なのか、という点が欠けているのではないかという話です。仮に、日本で議論されているグローバル人材の考え方がその通りだとしても、そもそもそれがどこまでグローバルに通用するのかという話にもなってくるのかなと思うんです。そのことと、本日一端が紹介されたり、あるいはさせていただいた書院の卒業生、あるいは愛大になってからこういう人材が出ているというところを拝見していくと、やっぱりちょっと違う。つまり、コミュニケーション能力とか語学力とか、あるいは異文化理解力とか日本発信力、それら自体が目的であるというよりは、それらを伸ばしていくような資質、価値観は何なのかということにやはりいきつかざるを得ないのではないか、という感じがしています。先ほどの藤田先生の話聞きつつも、本日ご紹介申し上げた書院、愛大出身グローバル人材に共通していると思われるのは、やはり独立自尊、自主自立。これがグローバル人材の根本ではないか、と思っています。グローバル人材の育成に取り組んでいる他大学の関係者と話をしている、最近こういう話をよく聞きます。海外留学の学生は増えているけれども、集団留学が多く、日本での人間関係や生活環境がそのまま海外に持っていかれている状況がある、せいぜい3か月、4か月といった短い期間の海外経験をして日本に戻ってきても実はあまり変わっていない、と。おそらく地域貢献についても、同様のことが言えると思うのですけれども、独立自尊なり、自主自立なり、あるいは藤田先生の手紙での言葉を借りるとすればコスモポリタンであったり、そういうことなのではないだろうかという感じがしています。その意味では、かなり技術的な側面に人材養成の議論が行き過ぎていて、レジメにも書きましたけれど、世界観、価値観、そういったものに裏付けられた人材養成の議論というのをもう少し深めていく必要があるのかなというふうに思っております。

時間がきましたので、とりとめのない話をここで終わりますけれども、最後に、東亜同文書院(大学)なり、愛知大学を、本日は学外の方も少なからずおられると思いますので、ご覧をいただく際にお願ひしたいのは、中国あるいは中国語の比重は高いですけれども、育ってきた人材、育っている人材というのを見る限りは、決してそうしたところには限定されないということであり、その根底にあるのは何かということについては、最後に申し上げたようなことがあるのかなという感じがしています。これで責任を果たせたのかどうかは分かりませんが、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。